

北海道の元気! NPO訪問

23 NPO法人 子どもサポートどろんこクラブ

文・加藤知美

発達障がいの子どもたちに安心と楽しみを 充実した体験活動、支え合いの社会めざし

◇ イギリスで見た「優しい社会」を日本でも

札幌の地下鉄北18条駅から歩いて程近いところにある二階建ての建物に「どろんこクラブ」の看板が掲げられている。児童育成会とも書かれてあり、学童保育のようでもあり、かつてはフリースクールがあった場所だった記憶もある。ここは、児童デイサービスや子どもたちの放課後支援などの活動をおこなう「NPO法人子どもサポートど

ろんこクラブ」。現在は、さらに東区に二カ所の拠点をもち、スタッフは正規職員・パートあわせて四二名の大所帯であり、一歳から二二歳までの一七〇名の登録児童がいる。

代表の金城朝子さんはこの活動の大黒柱であるエネルギーシユな女性。沖縄出身でかつては金融系企業で働くキャリアウーマンだった。さらなるキャリアアップをめざしてイギリスに留学した。サッチャー政権末期の時代のこと、町には失業者があふれホームレスが目につく様子はバブル経済の日本とは対照的だったが、金城さんの目に映ったのは優しく支えあう人々の真つ当な行動の数々だった。スーパーマーケットの入り口にたたずむホームレスを邪魔者扱いする人はおらず、客のひとりほ店から出ると手にしている二つの袋のひとつをそのホームレスに黙って渡していた。また、求めに応じてポケットから小銭を出して渡す人も多かった。お年寄りを大切にする一方、行儀の悪い子どもをきちんと叱り、他人を思いやり、決してぎすぎすしない暮らしぶりがあった。金城さんは、居心地の良いイギリスでの永住も考えたが、日本に戻って日本をそうした社会にする道を選択した。

まずは社会福祉士の資格をとるために大学に入るが、かねてから好きな土地であった北海道の地

を選んだ。福祉の科目にとどまらず、障がい児についても学び、特殊教育の教員免許も取得した。そして、在学中からフリースクールでアルバイトをするなど現場へ足を運ぶうちに、発達障がいの子をもつ親の悩みに深く関わることとなった。

◇ 見過ごされがちな発達障がい児の支援へ

自閉症や学習障害などの発達障がい、日常生活上さまざまな困難を抱えているも、一見、障がいが見えにくいために周囲から理解されず、養護学校に行っても、むしろ他の障がい児のお世話係とされたりするなど支援を受けにくく、また、放課後に遊びに行く場所もないのが実情だった。さまざまな機関に相談するも、当時、親の望むような仕組みはなく、「それならそういう場をつくらう」と、二〇〇一年に任意団体「どろんこクラブ」を設立した。助成金を申請するにも団体としての活動実績が必要となるため、まずは自分たちの力だけで始めるしかなかった。

発達障がい児を支援する「療育」は、就学と同時に公的な制度がとぎれていたため、どろんこクラブでは学童期の療育と放課後支援を中心に活動



代表の金城朝子さん



さまざまな体験活動のひとつに
畑づくりがある

を組み立てた。体を使って楽しく遊んだり、子どもは子ども集団の中で育つものと考え、障がいのある子どもも一緒に遊ぶ経験ができるようにした。子どもたちが安心して子どもらしく元気に楽しく暮らせるように、会費を払えば誰でも参加できる仕組みとした。毎日一〇人ほどの子どもを金城さんとパートスタッフの二人で受け入れ、多くのボランティアに支えられながら運営した。

当初、リースクールの一部を間借りしていたため家賃負担も少なかったが、そのリースクールが移転することとなり、二階建ての全棟を引き継ぐか別の場所を探すかの選択を迫られた。あれこれ模索した結果、全棟を引き継いで、民間学童保育所の指定を受けて市の助成金と保護者の負担金で家賃をまかなう見込みを立て、家主との賃貸契約のためにNPO法人格も取得した。また、送迎や夜間預かりなどのサポートサービスも開始した。

その頃、障がい者・児をめぐる国の制度も大きく変わった。従来は措置制度のかわりに、利用者が必要に応じて事業者と契約してサービスが受けられる支援費制度が始まり、児童にもヘルパーなど居宅サービスが適用されるようになった。さっそく制度を利用したサービスを提供するのに必要な手

続きをとうとうとしたが、要件を満たしていないなどと断られ、ようやく二年後の二〇〇五年四月に障害福祉サービス事業所の指定を受けることができ、居宅介護と移動支援の事業を開始した。

◇ 増えるサービス利用者、ボランティアの支え

支援費制度は翌年には自立支援法へと移行した。専有の保育室などがなくても児童デイサービス事業が自立支援法施行によって可能となったため、二〇〇七年になって児童デイサービスの事業を始めた。ニーズは多く、新たに東区に一戸建てを借りて未就学児童対象のデイサービス事業所「どんこキッズ」を開設した。

任意団体設立当初は小学生だった子どもも今や高校生となり、体格も大きな子どもたちと新たに参加する小学生が同一の建物で活動するのが難しくなったので、昨年暮れ、さらに新たな児童デイサービス事業所「どんこジュニア」を開設し、小学生が利用している。ここでは、学校が終わった子どもたちがスタッフやボランティアと公園へ行って遊んだり、プールに行ったりする。さらに、畑づくりや陶芸の活動など体験や創作の機会を大事にしている。

どんこクラブの利用者は北区・東区のほか南区など札幌市全域にわたっている。児童デイサービスや居宅介護などの公的制度によるサービスのみならず、リースクールや放課後支援の充実ぶりが支持されているのだが、そうした活動を支える多くのボランティアの力も見逃せない。約二〇



思い切り体を動かせる室内体育室

〇名の登録があり、子どもの放課後の公園遊びや休みの日の遠足やスポーツ活動、体験活動などを一緒にする。放課後の遊びもあえて公共の場である公園にでかける。そこで遊んでいる近所の親子にも積極的に声をかけ、「よろしくね」「お話ができなからいきなり触っちゃたりしたけどごめんね」などと説明することで理解を求めます。

金城さんが二〇年前のイギリスで見た優しく支え合う社会に確実に向かっていくかたちが見える。

◆ NPO法人子どもサポートどんこクラブ

所在地 札幌市北区北16条西4丁目2-2

TEL 011-737-1335

WEB <http://www3.ocn.ne.jp/~doronko/>